

I 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
 (万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破つたり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
0	0	●	0	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

エスニシティは日本語では「民族性」、「民族的結合」、「民族意識」などと訳されている。人種 (Race) が人間の生物学的な特徴による区分単位で、皮膚の色、頭髮、頭の形、血液型などを総合して分類されるグループであるのに対して、民族は言語・宗教・慣習などの文化的諸特徴や伝統を共有することによって歴史的に形成された同属意識をもつ人々の集団を指している。民族が人種・国民の範囲と一致するとは限らないし、一定の地域内に住んでいるとも限らない。また、複数の民族が共存する社会も多い。

ここで注意しなければならないことは、エスニック・グループという少数民族やある社会の下位集団と結びつける傾向があるということだ。例えば、アメリカ合衆国では、プエルトリコ人、メキシコ人、イタリア人、中国人などのマイノリティ・グループのことはエスニック・グループとして認識しても、いわゆるWASP (White Anglo-Saxon Protestant) を指して言うことはない。日本においても、エスニック料理というとき、果たしてフランス料理やイタリア料理も含むであろうか。しかし、本来は、エスニック・グループはマイノリティ・グループに限ったものではないのである。

言語とエスニック・アイデンティティの関係について論じる前にエスニック・アイデンティティそのものについて考えてみよう。

まず、アイデンティティとは客観的なアプローチからも主観的なアプローチからも捉えることができる。客観的なアプローチとは、エスニック・グループやそのアイデンティティの存在を言語、地理、宗教などの客観的な特徴で定義することにより確認するアプローチである。一方、主観的なアプローチとは、自分がそのエスニック・グループに帰属するのだという主観的な信念こそが大切であるという見方である。

また、アイデンティティには自己を内面的に定義するのか、外部から定義されるのかという側面がある。これは「私は日系アメリカ人なのだ」と考えることと「あなたは日系アメリカ人よ」と言われることの違いともいえる。

実際のアイデンティティの確立には、自分が自我をどう認識するかと周りが自分をどう認識するかの両方が関わってくる。⁽¹⁾

世界規模でのヒンパンな移動や社会間交流があるにもかかわらず、エスニック・グループは何世代にもわたって存続し続けてきた。では、エスニック・グループの共同体意識を保つ背景にあるものは何なのであるか。そこには少なくとも二つの要因があるといえよう。一つは自分たちの集団の起源として親族・祖先などを共有するという血縁関係を重視する意識で、もう一つは自分たちに備わっている言語、宗教、習俗などの文化的特徴を絆として自分たちを他と区別するための象徴的な境界線を維持しようとする姿勢である。⁽²⁾

ある個人・集団が自集団境界線の内に入るかどうかを決める境界線引きに対しては、一方には、宗教や言語などの文化的特徴をアイデンティティ・マーカー（指標・標識）として強調する態度があり、もう一方には、文化的特徴が時とともに変化したり失われたりしたとしても集団の境界線の存在そのものが大切であるとする態度がある。これらの態度は二つの相反するものではなく、として考えるべきであろう。民族の文化的特徴を強調する態度が強い場合には、集団内での文化的特徴の変化（例えば、移住先で民族のことが話せなくなった三世や四世など）を嘆くことがある。一方で、境界線の存在そのものを重視する場合には、民族のことが話せなくても民族性は保たれると考える。移民の三世や四世が成長してから祖先の文化や歴史に興味を持ち、ことばを学びはじめることがあるが、この場合には、たとえ一世と同じ文化的特徴の保持を目指さないとしても、境界線を意識し、民族の文化的特徴に注目しているという点では文化的特徴を強調する態度に近づいているといえよう。⁽³⁾

それでは、エスニック・アイデンティティにおいて言語はどのような役割を果たしているのだろうか。ことばには象徴機能と実質的機能の二つがある。言語とアイデンティティの関係を言語の果たす役割という観点から見れば、象徴機能が重要になってくるであろう。

先ほど、境界線引きをする際に宗教や言語などの文化的特徴をアイデンティティ・マーカーとして重要視する

態度があることに触れたが、そのような態度の中でも言語の重要性は一様ではない。まず、自分が所属するグループの言語ができるということがエスニック・グループのアイデンティティを維持していく上で本質的なものであり、重要であるという考え方があつた。確かに言語はしばしば移民グループのアイデンティティの象徴となる。例えば、文化的特徴や伝統を保護、または復興させようとする動きの中には言語がエスニシティの復興の象徴としての役割を果たすことはめずらしくない。

しかし、現実には、一般的に移民の言葉は移住先の仕事、学校、マスメディアなどの影響のもと一世から三世の間に失われることが多いといわれている。言語をアイデンティティ・マーカーとして重要視する態度からすれば、このように自分のエスニック・グループのことが話せなくなるということ、エスニック・アイデンティティをソウシツした⁽⁴⁾という証なのである。つまり、言語を同化の指標として扱い、個人やエスニック・グループの同化の程度を表すサインとして見るのである。

一方、エスニック・グループの象徴、すなわちそのグループに属するというマーカーは、言語に限つたものではなく、宗教など他の文化的特徴もあり、言語はその一つに過ぎないという見方もある。この見方では、移民グループのエスニック・アイデンティティの維持における同化の指標として言語の重要性を強調してはいない。実際、世界を見ても言語を失つたにもかかわらず、エスニック・グループとしてのアイデンティティを維持している例はある。オーストラリアのオランダ系移民、ロンドンのギリシャ系、トルコ系移民などがその例といえよう。生まれてから日本語を話すことを当然と思ひながら育ち、他の言語は外国語として学ぶものと考えられる人が多い日本では、日常生活において言語とアイデンティティの問題を考える機会が少ないかもしれない。しかし、在日韓国・朝鮮人やアイヌなど日本国内のマイノリティ文化の再認識への動き、在日外国人の増加とその子どもの教育問題、国際結婚の増加など確実にその機会は増えている。

言語とアイデンティティについて考えるとき、全ての人や集団に一樣なものさしをあてるのではなく、ある人や集団にとっては言語が一番重要なマーカーでありえる一方で、その言語を話さなくてもエスニック・アイデン

ティティを保持していることもありえるのだということを認識しなければならない。その言語がその個人またはその集団のアイデンティティにとってどんな意味を、どのくらい持っているのかを考えるべきだろう。

(恩村由香子「言語とアイデンティティ——ことばが話せなくてはだめですか?——」による)

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分が何者なのかを内面的に探究すること、自分に対して周りの人々がもつ印象の両方が関わってくる。
- 2 自分と周りの人々の双方が、自分の客観的特徴をどのように認識するかが関わってくる。
- 3 自分が共同体意識を持つているかという観点と、周囲が自分を共同体の一員として認めるかという観点の両方が関わってくる。
- 4 自分は何者でどこに帰属すべきかを決める過程で、周りの人々との人間的な関係が影響を与える。
- 5 自分が帰属するエスニック・グループを選択する過程で、周りの人々が自分をどう見ているかが影響を与える。

(C) 線部(2)について。「象徴的な境界線」を維持するための指標として適当なものを1、不適当なものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 服装 ロ 居住形態 ハ 身長 ニ 血縁関係 ホ 食事

(D) 空欄 にはどんな言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 反復するもの 2 表裏一体 3 並存的なもの 4 同一体 5 連続体

(E) 線部(3)について。筆者が考える言語とアイデンティティの関係を最も適切に表している一文を本文

中から探し出し、最初の三字と終わりの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「民族的結合」は、社会における人々の移動や交流が盛んな場合にもたらされ、集団の起源の共有や宗教慣習などの境界線を生み出す。

ロ 移民三世が民族のことばを話せなくても、本人のアイデンティティの確立・維持には影響しないと考えるのは、境界線の存在自体を重視する態度である。

ハ エスニック・グループは、歴史的に形成された同族意識をもつ人々の集団であり、マイノリティ・グループの一部を形成する。

ニ アイデンティティを求める姿勢は、自分の祖先や育った環境、自分を取り巻く社会環境や文化、そして歴史への関心につながる。

ホ ことばの象徴機能と実質的機能のうち、共同体意識を保つために用いられるのは象徴機能であり、意思の伝達は副次的なものである。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题用紙に書くこと)

鶴は飛ばうとした瞬間、こみ上げてくる水の珠たまに喉をつらぬかれてしまった。以来仰向いたまま、なんのためにかうなつたのだ? と考へてゐる。

題して、「噴水」。(注1)丸山薫の第一詩集『帆・ランプ・鷗』一九三二年(昭和七年)刊に所収。おそらく作者二十代の折の作品である。

丸山薫の詩にはじめて出会つたのは『物象詩集』(一九四一年刊)においてで、中学生の私が新本屋で買ったわずか二冊の詩集のひとつ(もう一冊は『山之口猥詩集』)なのだが。これには右の「噴水」はない。戦後に出た創元選書の詩集『十年』(一九四八年刊)にはあつて、これはこの詩人の初期詩集五冊の合本だから有難かつた。粗悪な紙のこの詩集をくりかえして読み、「噴水」などはたちまち暗誦しよした。

当時、私は肺結核の療養中だつた。敗戦でせつかく自由にはばたける時代がきたというのに、血痰たんを吐いて安静を命じられ、あたら二十歳はたちの身空で万年床に仰向いて、せめて本を読みちらしていた。

好きな詩集に出会うたびに、それを下手にまねた詩がやたらに書けた。ノートが何冊もたまつた。そのうち、ただ書いているのでは物足らず、ひそかに(4)ケイトウする詩人に読んでもらおうと思ひ立つた。

若さとは向う見ずなものだ。私自身は人見知りの塊かたまりりなのに、(4)オクメンもなく習作を「噴水」の詩人にあてて郵送したのだ。すると、おどろいたことに返信があつた。封をひらくと、汝なんぢの詩は幼稚で愚劣で見所なしという腹が立つほど正直な批評が書いてあつた。ちなみに、その証拠の文面が『丸山薫全集』第五巻の書簡の項に載っている。こんなことを自慢で言うのではないけれども、今更恥じてみせても仕方がない。とにかく私は仰天し、あとにはひけず、以来押しかけの丸山薫門下の一人となつた。

戦後は焼跡と闇市(注2)の時代であり、民主主義とMP(注3)の時代であり、というふういろいろな言える一つとして、

戦後は文通と訪問の時代だったと思う。電話のある家はまだ少なく、街には喫茶店もホテルも林立しておらず、そこで人々は、用件の多少によらず文通し、往来した。(1) その点、万事が過剰に便利で、万人がやたらに多忙な昨今のほうが、互いのコミュニケーションは貧しくはないか。

丸山薫氏は豊橋にいた。やがて氏を後見人に、若者たちで薄い同人詩誌をつくり、同人は東北から関西まで散在していた。おおかた文通で氏のもとに慕い寄った仲間だった。その仲間たちとの交流から、ようやく私にも青春らしい哀歓が生じた。一九五〇年代の前半のことだ。

そのころ、所用で上京された丸山氏が、世田谷の私の家（正確には父の、私は脛かじりで）に一泊してくれたことさえあった。そのとき、氏を日比谷公園に案内した。というより、やや無理強いに引っぱっていった。例の愛誦詩「噴水」は、この公園の鶴の噴水がモデルであった。しかしあの鶴はもうないでしょう、と詩人が言うので、いやあります、と言い張って、その現の証拠を見せたかったのだ。

戦後の日比谷公園は、公会堂・音楽堂などが米軍に接収され、ほぼ占領軍用の公園だったが、やがて都に戻って、ぼちぼち整備中だった。日比谷の交叉点から入ってすぐが心字池。ずっと奥の雲形池のまん中で、青銅の鶴は翼をひろげ、仰向いて水を吐いていた。

「ほら、あるでしょう」

私は得意げな顔をしたにちがいない。詩人はじろりと一 [] して、

「違いますね」静かな、しかし断乎とした口調であった。「こんなものではありません。もつと猛々しい、力強い、天を刺すような鶴でしたよ」

私はまたも仰天して、がっかりした。少年時、私はこの公園の近くで育ち、この池にもオタマジャクシを掬いに来た。その頃からたしかにこの鶴の噴水はあったのだ。

だが、詩人は少年の私より先にこの噴水に出会っている。「氷柱の歌」という詩もあって、この青銅の鶴が翼から氷柱を垂らして立つ、鋭い冬の姿をうたったものだ。ほかに鶴のイメージをうたった詩は何篇もある。(2) この

鶴の詩人が「違う」と言う言葉を信じないで、なにが師事だろう。では、しかし、その猛々しい鶴の噴水は、どこにいて、どこへ飛びさってしまったのだろうか？

あれから三十年。詩人はもうこの世におられない。私は、丁度あのときの詩人の年輩になった。

日比谷公園の雲形池には、いまでも翼をひろげた青銅の鶴が、仰向いて水の珠をふきあげている。緑陰の池畔では、子供らが泥かきまわしてザリガニ採りに熱中している。

藤棚の下には由来書きの立札が、要旨つぎのようなことを語っている。——そもそも日比谷公園は一九〇三年（明治三十六）に開園した。本多静六博士の設計による、首都東京にはじめての洋風公園だった。雲形池もドイツの造園書を模範にして造られた。そして鶴の噴水は、東京美術学校の津田信夫、岡崎雪聲（せつせい）の両氏の共同制作の作品だった。日本で三番目の装飾噴水の由。

私は間違っていないかった。「噴水」のモデルの鶴は、やはりこれなのだ。ところが……詩人の眼めは、やはり正しかった。

じつはこの池には、さんざんな来し方があった。まず戦争末期の一九四三年（昭和十八）に埋め立てられて、高射砲陣地がここに据えられた。公園をとりまく鉄柵も金属供出（注4）ですべて取りはずされ、青銅の鶴も、もちろん消えた。そして敗戦後は占領軍の専用公園だから、どのみち軍用地。ようやく一般人も立ち入りだした一九四九年春に、消えたはずの青銅の鶴が、こつせんと心字池のほうに現れた。当時の写真によれば、水面の岩にいきなり（たす）付んで水を噴き上げ、子供らが翼によじ登って遊んでいる。

公園管理の職員が秘密裏に、物置のガラクタ品のなかへ押し込んでおいたのだとか。雲形池は一九五三年（昭和二十八）夏に、ようやく高射砲陣地跡を掘り返して十年ぶりに復元する。噴水用の石組みの台座もぶじに現れ、心字池からとりもどした鶴をその上へ据えた。

詩人をここへ案内したのは、それからほどなくであったのだ。そもそもは石組みの台座の上に、さらに青銅の

丸い台座が積まれ、鶴はそのてっぺんで仰向いていた。まさに鸞くわんは天を刺し、翼は雲にとどきもしたか。だがその青銅台座は供出され、本体の鶴だけが心ある職員義拳により生き延びたのだ。ようやく石組みの台座へ戻りはしたものの、とんと寸詰まりなのだった。

戦中の金属供出のすさまじさは、立ちならぶ街路灯も、橋の欄干も、制服の金ボタンさえも、根こそぎ持ち去られた。噴水ごときが生き延びるわけもなかった。そんな時代認識にくわえて、詩人の目は、その寸詰まりをずばり見抜いたのだな。若き日の心象を託した鶴とは、おそらく情けないほど別物だった。

丸山薫氏は、大柄で、名のごとく丸い山がのっそり動くあんぱいの人だった。いわゆる抒情詩人の柔弱なイメージからはずれていた。なにか不器用な存在が悠々とこの世にあることの、やすらぎなごし乃至は元気が、こちらに伝わってくる。人目にそばだつ鶴よりもむしろ台座の詩人であるか。そしてその詩篇には、大きな意志の悲しみが横たわる。

病氣と失恋のほかはなにもなかったような、ひたすら貧しいわが二十代ではあったが。顧みれば丸山薫(3)に出会ったことの幸運が胸にひろがる。まことに詩は一行一行まっ正直に、力をひそめて書くものであろう。……さて、この文章にしてから、そのように私は書いているか。

(小沢信男「日比谷公園の鶴の噴水」による)

(注) 1 丸山薫——詩人(一八九九—一九七四)。

2 闇市——不正な取り引きによる品物を売る市場。

3 M P——Military Police (憲兵) の通称。ここでは占領軍の M P のこと。

4 供出——政府が民間に対して強制的に物資を提供させること。

問

(A) 〓〓〓線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)

(B) 〓〓〓線部の意味として、最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 心優しい行い
- 2 胸のすく行い
- 3 正しい行い
- 4 勇気ある行い
- 5 美を愛する行い

(C) 〓〓線部(1)について。筆者はなぜそのように考えるに至ったのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 様々な人と手軽につながり、手軽に関係を断てるようになったせいで、他人を粗末に扱いがちになってしまったから。

2 技術が発展したおかげで、かつてであれば自然と疎遠になっていたはずのひととの関係が維持されるなど、余計な付き合いが増えてしまい、一つ一つの関係が薄まったから。

3 電話がなかったおかげで、コミュニケーションが機械によって媒介されることがなく、今よりも遙はるかに自然であり、かつ人間的だったから。

4 かつては人間関係に手間がかかり、その分だけ熱意が求められたために、おのずとコミュニケーションが濃密になったが、今はそうではないから。

5 かつては人付き合いに大変な労力が必要であり、そのために優先順位がつけやすかったが、今ではそれが難しくなってしまったから。

(D) 空欄 を補う言葉として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 蹴しゅう
- 2 掃ま
- 3 擲てき
- 4 喝かく
- 5 警きやう

(E) 〓〓線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 昔からよく知っていた鶴の噴水が詩の中に登場するものと同じであってほしいといった個人的な感情より

も、自分が師として選んだ者の言葉に信を置くこと。

2 詩のモデルとなった鶴はもう存在しているはずがないと言う詩人を驚かせようとしたところ、かえって鼻柱を折られてしまったので、これを機に心を入れ替え、弟子としての分際をわきまえること。

3 鶴は詩人の記憶の中で美化されただけであり、したがって、それが詩の中の鶴とは違うという詩人の言葉は間違っているが、だからこそその言葉を信じるという不条理さに師弟関係の真髄はありと考えること。

4 たとえ自分が間違っているとしてもそれを決して認めまいとする詩人の頑固さに敬服し、彼の言葉はなんでも鵜呑みにしようとする事。

5 師を喜ばせたいという純粋な気持ちがまったく顧みられなかったとしても、そのことを恨みに思ったりはせず、詩の中にしか存在しないものとして鶴のイメージを尊重すること。

(F) —— 線部(3)について。ここで言う「幸運」の内容として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 肺結核で寝たきりだったため、張り合いのない暗い日々を送っていたが、丸山薫に師事したことがきっかけとなり、同世代の仲間たちとの多感な交流が思いがけず始まった。

2 優れた詩人に親しく付き合ってもらった貴重な思い出とともに歳月が過ぎる中で、いつしかものを書く人間としての誇りを教えられた。

3 自作の詩を丸山薫に読んでももらい、率直な批判を受けたおかげで、自分には詩の才能があると思いついていた若気の過ちを正すことができた。

4 丸山薫の詩に入れ込むあまり、真情を吐露した習作を送りつけ、勝手に弟子入りしたことで、病気で鬱屈していた状態から解放された。

5 愛読する詩を書いた作者と実際に知り合って、著作だけでは窺い知ることのできない素顔に接し、文学だけに留まらない、人生そのものの師と出会うことができた。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「私」が丸山薫を師として選んだのは、彼が「台座の詩人」というよりは「鶴の詩人」と呼ばれるにふさわしい人物に見えたからであったが、その判断は間違っていた。

ロ 詩「噴水」にうたわれた鶴の鮮烈さに目を奪われた「私」は、作者丸山のことを「鶴の詩人」だと思っていたが、このイメージを主に台座によって成り立たせていた丸山は、まさに「台座の詩人」であった。

ハ 飛ぼうとしながら飛ばず、水の珠を吐き出すばかりの鶴は、その下の台座のことなどまるで問題にもしておらず、そのことに台座は深い悲しみを覚えていた。

ニ 丸山は不器用であるがゆえに、周囲にはあまり理解されないところがあったが、それに耐えてその場に居続けることで人々の精神的な支えとなってくれた。

ホ 「私」をはじめとする文学青年たちが丸山薫を慕ったのは、詩人としての優れた才能もさることながら、不器用だが己に忠実なその人間性に信頼の念を覚えたからだった。

三 左の文章は、『しぐれ』という物語の一節である。清水寺に参詣した際に出会った姫君に中将殿は心惹かれ、手紙を送ったが、姫君はそれを受け取らなかつた。本文は、この二人がその後もそれぞれに清水寺に滞在しているうちに、清水寺の別当が姫君を見初め、姫君の乳母にその意向を告げるところから始まる。これを讀んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

さるほどに、^(注1)清水の別当、この姫君を見奉りて、^(注2)乳母に取り寄りさまさまに申しける。乳母の娘二人ありけり。

姉は少納言とて二十になり、妹は侍従とて十八になりけり。親に申すやうは、^(注3)「親の生きて渡らせ給ひ候はばこそ

よき御事もおはせめ、僧とても何か苦しき。我々もいつとなく心細くてあらむよりは、⁽¹⁾めやすきさまならばそれに過ぎたる事あるまじ」⁽³⁾、「いざやさらば、この別当に夕さり盗ません」とて、母と少納言とは一心になりぬ。侍

従思ふやう、さも美しき御姿を僧に見せんことこそ心憂けれ、あはれ、この事、姫君に申さばや、いかに嘆かせ給

ひなん、御心の内もいとほしくて、⁽⁴⁾やすらひあるところに、⁽⁵⁾上童、^(注4)前の文のことをひそかに侍従に語りけり。侍

従心の内に思ふやう、あはれ、さらば、さやうの人に知らせ奉らばやと思ひけれども、尋ぬべき便りもなし。思ひ

煩ふほどにやうやう日も暮れゆけば、母と少納言とは姫君盗ませに別当のもとへ行きにけり。侍従は「御伽に候

ふべし」とて行かざりけり。侍従つくづくと思ひ続けるに、⁽⁶⁾終に隠れあるまじと思ひて、「母と姉とは、姫君を別

当に盗ませに行きつるなり。いかがせん」とぞ申しける。

その時、姫君「夢か現かいかにせん。⁽⁷⁾僧とはなにぞや。親に遅れし日よりして本意なき命ながらへて、⁽⁸⁾今かか

ることを聞く悲しさよ。さらに我が命惜しからず、我引き具して出でよ。底の水屑ともなりなん」ともだへ焦が

れ給へば、侍従せん方なく悲しくていかがせんと思ひける。すでに入相の鐘も告げ渡り、⁽⁹⁾今はかうぞ覺えける。

侍従申しけるは、「さらば出でさせ給へ。いづくにも恐れせ参らせん」とて、我が身も姫君も薄衣ばかり引き被さ

て落ち出でけれども、いかなる人を頼みていづくへ行くべしとも覺えず。余りのせん方なさに隣の局の口にさし

寄り、侍従「物申さん」と言ひければ、中将殿「何事ぞ」とのたまへば、侍従御側にさし寄りて、「憚り入りたる

御事にて候へども、これに若き人の入らせ給ひ候ふを別当見参らせ、ただ今取り参らせんと候ふ程に、余りの心憂さに忍ばせ申したく候ふ。これへ参らせんことは便なきことにて候ふやらん」と申しければ、中将殿、やがてこの人と見給ひけるほどに嬉しきはせん方なし。「何か苦しく候ふべき。とくとく入らせ給へ」とありければ、姫君、侍従喜びて入らせ給ひぬ。さて、灯をば几帳より外にほのかにとぼせたり。中将殿、心の内の嬉しきは譬へん方なかりけり。

(注) 1 清水の別当——京都の清水寺の寺務を統轄する最高位の僧のこと。

2 乳母——姫君はすでに両親を亡くしており、このときまでこの乳母が姫君を養ってきた。

3 親——姫君の両親のこと。

4 上童——姫君の身近に仕えている。

5 前の文のこと——これより前に、姫君を見初めた中将殿から手紙を送られたことがある。そのときは、手紙を上童が取り次いだ。

6 御伽——姫君のそばで話し相手をする人。

7 入相の鐘——夕暮れに寺で鳴らす鐘の音。

問

(A) ——線部(1)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 今さら 2 いつも 3 今のところ 4 いつしか 5 いつからか

(B) ——線部(2)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 見慣れている 2 華美な 3 温厚な 4 気取らない 5 見苦しくない

(C) ——線部(3)について、これは誰の発言か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 母(乳母) 2 少納言 3 侍従 4 清水の別当 5 上童

(D) ——線部(4)の現代語訳を六字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(E) ——線部(5)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 息をひそめている
- 2 悔やんでいる
- 3 ためらっている
- 4 感情を抑えている
- 5 心配している

(F) ——線部(6)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 この企みに自分も巻き込まれるのかもしれない
- 2 この企みが姫君に知られずすむことはないだろう
- 3 この企みは本当に実行されるのかもしれない
- 4 この企みを打ち明けることはないだろう
- 5 この企みがとがめられないことはないだろう

(G) ——線部(7)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 その僧が私を求めているのはなぜなのか
- 2 僧が私との結婚を望むとは思議なことだ
- 3 僧はどんな暮らしをしているのだろうか
- 4 僧と結ばれるなんてとんでもないことだ
- 5 その僧というのはいったい誰のことか

(H) ——線部(8)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 楽しくもない
- 2 予定になかった
- 3 感動のない
- 4 役に立たない
- 5 望んでもいない

(I) ——線部(9)について。姫君は何を「聞」いたのか。その具体的な内容にあたる一続きの発言を、本文中から二十三字以内で探し出し、初めの三字と終わりの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) ——線部(10)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 ますます悲しくなってきた。
- 2 今こそ計画を実行するときだと思った。
- 3 今すぐ決断しなければと思った。
- 4 もう夕刻になってしまったと気づいた。

5 早くも別れの時だと思われた。

(K) —— 線部(1)の文法的説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「忍ばせ」は動詞、「参らせ」は尊敬の補助動詞、「ん」は意志の助動詞

2 「忍ばせ」は動詞、「参らせ」は謙讓の補助動詞、「ん」は推量の助動詞

3 「忍ばせ」は動詞、「参ら」は丁寧の補助動詞、「せん」は意志の助動詞

4 「忍ば」は動詞、「せ」は使役の助動詞、「参らせ」は謙讓の補助動詞、「ん」は意志の助動詞

5 「忍ば」は動詞、「せ」は尊敬の助動詞、「参らせ」は尊敬の補助動詞、「ん」は推量の助動詞

(L) —— 線部(2)について。この人物は誰か。最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 清水の別当 2 少納言 3 姫君 4 侍従 5 上童

(M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを一つ選び、番号で答えよ。

1 姫君は、乳母が清水の別当に協力したことを知って、命をなげうつことを覚悟するほどに望みを失った。

2 姫君の乳母は、親のいない姫君を養うことに強い不満を抱いており、関係を解消したいと思っていた。

3 侍従は、親に従わないことに自責の念を抱きつつ、姫君の中将殿への思いを遂げさせたいと思っている。

4 侍従と姫君は、隣の局にいる人物が、以前姫君に手紙を送った人物だと気づいていて、助けを求めた。

5 中将は、侍従が助けたがっているのは自分が心を寄せる姫君だとは知らずに、かくまうことを了承した。

【以下余白】

